

2025 年の秋分は 9 月 23 日です。

次の節気である寒露前日までの期間 9/23～10/7 を指す場合もあります。

「秋分の日」は国民の祝日に関する法律によって制定された祝日で、
「祖先をうやまい、亡くなった人々をしのぶ」日と定められています。

お彼岸の時期、ヒガンバナの話題をひとつ。

誰がなぜ彼岸花を日本中に植えたのか。彼岸花を日本中に植えたのは、特定の個人ではなく、主に農家の人々や、墓地を管理する人々です。

<彼らが彼岸花を植えた理由は次の通り>

1. 害獣対策のため

田畑の保護：彼岸花の球根には毒が含まれておりモグラやネズミなどの小動物がその毒を嫌い、この性質を利用し、農作物を守るために、田んぼのあぜ道や畑の土手に植えられました。

遺体の保護：かつて土葬が一般的だった時代には、ネズミやモグラが墓地の遺体を荒らすのを防ぐため、お墓の周りに植えられました。

2. 食用（救荒作物）として

飢饉に備えて：彼岸花の球根は有毒ですが、水にさらして毒を抜くことでデンプンを採取でき、食用にすることができました。飢饉の際に非常食とするため、各地で植えられたと言われています。ただし、毒抜きが不十分だと危険なため、口にしないよう注意が呼びかけられています。

3. 雑草対策のため

彼岸花の毒は他の植物の生育を阻害する作用も持っているため田んぼのあぜ道の雑草対策として植えられた側面もあります。

<日本に広まった経緯>

彼岸花はタネを作らないため自然に分布が広がることはなく人為的に球根を分球させ人の手で意図的に植えられてきたことで全国に広まったと考えられています。

通常の植物が受粉し風や鳥の力を借りて、あたりに子孫を増やしていくのとは異なり、多年草であるヒガンバナが咲く風景は、人の手によって形作られた風景です。

その気になってヒガンバナのある風景を思い返してみると、田んぼの畔や川の土手のような、人の生活の場に近いところがほとんどで、深山幽谷ではヒガンバナはまず見かけません。

すべてのヒガンバナの株は、誰かがその場に移植したから、その場に咲き続けている。

誰かがその場所にヒガンバナを植える気になったかどうかだということになる。

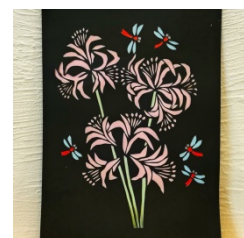
ヒガンバナが咲く土地にはヒガンバナにふさわしい人々の風景が見えてきます。

曼珠沙華咲いてここがわたしの寝るところ

種田山頭火

なかなか死ねない彼岸花さく

種田山頭火



山頭火の句に詠まれた彼岸花と曼珠沙華。

同じ花なのに、印象がまるで違います。言葉の持っている世界が、正反対なのです。

曼珠沙華という響きに伴う甘やかさに比べ、彼岸花のなんと寂しいこと。

地の果てまで行ってしまいそうな頼りなさです。

死を連想させる「彼岸花」と対比して、生き続ける生命力や困難に立ち向かう姿を表現しています。

2025 年の白露(はくろ)は9月7日。

次の節気である秋分前日までの期間 9/7~9/23 を指す場合もあります。

草や木に白い露がつくようになるとされる「白露(はくろ)」。

暦の上では、大気が冷えてきて露ができ始め朝晩に秋の気配を感じる頃と言われていますが…実際はどうでしょうか？

すでに秋に入っていますが、今年は残暑が厳しく暑さはなかなか収まりません。

何かと体調を崩しやすい季節の変わり目には、暦を意識し、

自然のリズムに合わせて、心と体をいたわる暮らしを

心がけてみてはいかがでしょうか。

暦の上では二百十日のあたりは古くから、野分などの災害が
起こりやすいとして、厄日(やくび)として警戒していました。

二百十日のほかに「二百二十日(にひゃくはつか)」も、
同様に野分などが多く、厄日として警戒されていました。

今年の二百二十日は9月10日(水)です。

酷暑から解放される日はいつになるでしょうか。

今年もまだまだ厳しい残暑が続く見込みです。

気温の変化や野分(台風)による風雨に十分に気をつけて、

健康にそして安全に日々を過ごしましょう。



大いなるものが過ぎ行く野分かな 高濱虚子

風神雷神図風呂敷

大自然の人知を超えた台風(野分)を目の当たりにした、
昭和9年9月21日の室戸台風が上陸した日に詠まれた句です。

この日は、「家庭俳句会」が鎌倉の鶴岡八幡宮で句会が行われ、午前中は雨風が強かったが、
午後には雨は止み、風がひゅうひゅう吹いていたそうです。

鶴が岡八幡境内の強風による被害を目にした虚子は、目には見えない「風」というものに、
「大いなるもの」の働きを感じたようです。

この「大いなるもの」の前では、謙虚にならざるを得ない。

掲句は、句集『五百句』に入れる際の推敲(すいこう)で初めて「大いなるものが過ぎゆく」
の形となったそうです。

台風の南風は北上するように北向きに吹くものだが、「北に行く」が「過ぎゆく」と推敲され
て、抽象化され単純化された。

「過ぎゆく」と表現して初めて、目には見えない「風」という「大いなるもの」が、人間に
関わりを持ちながら通り過ぎてゆくという、実感を伴う形となったとのこと。

虚子は推敲した足跡を残らず「句日記」や、「ホトトギス」に残しているそうです。

2025 年の処暑(しよしよ)は 8 月 23 日です。

次の節気である白露前日までの期間 8/23～9/6 を指す場合もあります。

処暑の「処」は落ち着くという意味で厳しい残暑もいよいよ和らぎ、時折吹いてくる心地よい夜風を感じ次第に長くなる夜を楽しみながら秋の到来を待つ頃のはずですが、地球温暖化が叫ばれる昨今、年々夏の暑さが増しているような気がします。

「秋暑」といって暑さがぶり返し、夏の疲れが出やすくなるのもこの時期です。

夏を惜しみながらも、秋への準備を始める目安の候です。

また、穀物が実り始め、収穫までもう一息というところです。



この時期は秋の台風が訪れることが多く、暦のうえで、「三厄日」と呼ばれる日があります。

「八朔」「二百十日」「二百二十日」がそれにあたり、古より暴風雨がやってきて稲作に被害をあたえる要注意の日とされてきました。

「厄日」は秋の季語にもなっており縁起の悪い日とされてきました。

二百十日が暦に記載されるようになったのは江戸時代の初期以後のことで農家に注意を促すことが目的であったそうです。

立春から数えて二百十日は例年、9 月 1 日前後になります。

台風が襲来する日と丁度、稲が開花する時期とが重なるため、昔から農家の厄日とされ、二百十日や二百二十日の頃には、風の神を鎮めるために「風祭(かざまつり)」という行事が行われてきました。



京都・松尾大社の「八朔祭」、山形の「大谷風神祭」などがあります。

地方によっては、風祭を「風鎮祭(ふうちんさい)」や「とうせんぼう」などと呼ぶことも。

2025 年は、八朔(旧暦 8 月 1 日)が 9 月 7 日、二百十日は 8 月 31 日、二百二十日は 9 月 10 日となっています。

芙蓉の花は、7 月から 10 月にかけて開花し、処暑の頃に見頃を迎える花の一つです。

特に、朝に白く咲き、夕方に赤くなる「酔芙蓉」は、処暑の時期に楽しむことができる花として知られています。



<処暑の時期の有名な一句>

砂の如き 雲流れゆく 朝の秋 正岡子規

<句意>

日常の朝の風景の中、ふと見上げると砂の如き雲が浮かんでいます。

それを見て、「ああ、秋なのだなあ」としみじみと秋を実感していることが伝わってきます。

見たままの情景を言葉で巧みに表現している一句。

2025 年の立秋は 8 月 7 日（木）です。

この日から暦の上では秋の始まりとされ、
期間としては次の節気である「処暑」（8 月 23 日）
の前日までを指します。

立秋は「夏が全盛期を迎え、秋の気配が徐々に立ち始める日」であり、
毎年 8 月 7～8 日に当たります。

ちょうど夏至と秋分の間となる立秋は、
まだ真夏ではあるものの
わずかに秋の気配が感じられる時期です



立秋と秋分はしばしば混同されますが、
両者はまったく異なるものです。

「秋が立ち始める日」の立秋に対して、
秋分を「秋の分かれ目となる日」と覚えるとわかりやすいでしょう。

【立秋】暦の上ではこの頃から秋の気配が感じられ秋風が吹くとされ、
「秋の気配が立つ日」という意味で「立秋」と呼ばれます。
立秋といっても夏真っ盛り、この頃から本格的な酷暑の時期になります。

この時期にお盆の行事を行う地域も多くあります。

お盆の正式名称は「盂蘭盆会（うらぼんえ）」。

お釈迦様の弟子目連があのだで苦しむ亡き母を救うために、お釈迦様の教え通りに
供養して成仏できたという逸話が由来です。

お盆には、ご先祖さまが迷わず帰ってこられる様に迎え火を焚き、
最終日には送り火を焚いてお見送りをする「精霊送り」などを行います。

また、ご先祖の乗り物「精霊馬」を野菜で作ります。

ご先祖さまが早く帰ってこられるように、
きゅうりで馬を作り迎えに行きます。

そして、ゆっくりと帰っていただくようにと、
茄子で牛を作りお見送りします。



『立秋や 旅止めまくと 思ふ間に』 小林一茶

意味：立秋が来たなあ。こんな旅は止めようと思っている間に秋が来てしまった。

「旅」について文字通りの旅か人生を旅と例えているかで解釈が変わってくる俳句です。
人生であるという説を取ると秋という季節も単純な季節ではなく、人生の折り返し地点
であると解釈できます。

2025 年の大暑は 7 月 22 日（火）です。

大暑は、7 月 22 日から 8 月 6 日頃までの期間を指し、一年で最も暑さが厳しい時期とされています。この時期は梅雨明け後の強烈な日差しが照りつける日々が続きます。

日本の生活に密着した節目の日を表す雑節に「土用（どよう）」があります。

土用は土を敬う期間で年に四回あります。

立春・立夏・立秋・立冬の前の各十八日間を指し土用が明けると新しい季節の始まりです。



大暑は夏の土用の期間に重なり、うなぎでお馴染みの土用の丑の日は、夏の土用にめぐってくる丑の日をいいます。夏の土用や土用の丑の日の風習は、最も暑い時期を無事に乗り切るための暮らしの知恵であることがわかります。

土用の丑の日にウナギを食べるという風習は江戸時代に活躍した蘭学者である平賀源内が作り出したといわれています。

古来より「ウナギは栄養価が高く精力の付く食べ物」とされていましたが、本来ウナギに脂がのっておいしくなる季節は冬であり、夏のウナギは身がやせて人気がありませんでした。

そもそも夏の暑い時期に脂っぽいウナギを食べることも避けられていたそうです。

夏にもウナギを売りたい、と近所のウナギ屋から相談を受けた平賀源内は、丑の日に「う」の付くものを食べるとよいという風習にちなみ、ウナギ屋に「本日土用の丑」と貼り紙をさせました。これにより店は大繁盛。



「土用の丑の日といえばウナギ」と人々に広く知られるようになったそうです。

また夏の土用の天気の良い日を選んで、服や本を陰干ししてカビや虫の害を防ぐことを「土用干し」と言い、この時期から見られる高波を「土用波」と呼びます。

昔は、打ち水で地表の温度を下げたり、すだれで日よけをしたり、風鈴の音で涼を呼ぶなど、さまざまな工夫で暑さをしのいでいました。

『二里の道 地さへ雲さへ 大暑かな』 尾崎紅葉

意味：二里の道を歩いているが、地さえも雲さえも大暑の暑さで遠く見えるなあ。

大暑の暑さともなると道の先に逃げ水が見え、雲も白く輝いて見えるでしょう。

歩いて 2 時間ほどの距離ですが、途方もない距離に見えての一句です。

2025 年の小暑は 7 月 7 日（月）です。

小暑はようやく梅雨が明け、暑さが本格的に到来する季節です。小暑には「暑さがだんだん強くなる時期」という意味があり、次の大暑（たいしょ）と合わせた 1 ヶ月間は厳しい暑さが続きます。

「大暑」の前の「小暑」ではありますが、近年は小暑のころには、すでに猛烈な暑さの日が続くようになりました。昔の人たちも、夏の暑さには悩まされていたようです。

暑き日を海に入れたり最上川

松尾芭蕉

最上川が暑い日を海に運び去るように見える様子を描写しています。

暑い一日を最上川が海に流し込むような力強い夏の終わりと、それによって訪れる涼しさを暗示しています。「最上川が、暑い日を海にいれている」と、まるで「最上川」が人の意思をもって「日」を「海にいれている」かのように表現しています。

小暑には全国でたくさんの祭りや神事があります。祭りで季節の移ろいを感じることができます。大きなお祭りをきっかけに帰省する人も多いのではないのでしょうか。

祇園祭（ぎおんまつり）

7 月 1 日（吉符入）から 31 日（疫神社夏越祭）まで、1 か月にわたって多彩な祭事が行われる京都八坂神社の祭礼です。

コンコンチキチン、コンチキチン。祇園囃子とともに、7 月の京都は祇園祭一色。

17 日の前祭（23 基の山鉾）と 24 日の後祭（11 基の山鉾）の神輿渡御と山鉾巡行、そしてそれぞれの巡行前 3 日間は宵山といい、それぞれの町に建つ山鉾を観覧する人で京のまちは祭りの熱気に包まれます。八坂神社の 3 基の神輿と、34 基の山鉾が合わさって、他では類を見ない活気溢れる豪華絢爛なお祭りです。

コンチキチンの祇園囃子が夏空に響き、山や鉾が通りをゆく山鉾巡行は、祇園祭のハイライト。前祭は四条烏丸から、後祭は烏丸御池から出発します。巡行順を確認する「くじ改め」や豪快な「辻廻し」など、見所がたくさん。

美しい刺しゅうや舶来の織物など山や鉾の懸装品と呼ばれる装飾品の美しさも見事です。豪華絢爛、「動く美術館」とも呼ばれる一大ページェントが繰り広げられます。



2025 年の夏至(げし)は 6 月 21 日(土)で、1 年で 1 番、昼の時間が長い日です。

冬至と比較すると、昼間の時間差は 4 時間以上もあります。暦の上では夏季の真ん中にあたりますが、実際には梅雨の真っ盛りで、農家では田植えに繁忙を極める頃。暑さのピークは 1 カ月ほど先になります。

夏至は地方によって様々で関東地方では新小麦を使った焼き餅を食べる風習があります。田植えの時期に小麦も栽培する農家が多く、夏至の頃に新小麦が収穫されることから、焼き餅を食べる習慣が生まれたとされています。焼き餅を食べるだけでなく、神様にお供えすることで、五穀豊穡を願う意味合いもあります。餅のように粘り強く、物事を最後までやり遂げられるように、という願いも込められています。

関西地方では、タコを食べる風習があります。タコが岩に足をしっかりとくっつけている様子から、稲がタコの足のようにしっかりと根を張るように、という豊作祈願の意味があるそうです

半夏生にタコを食べる理由はきつかった田植えまでの農作業を終え、これからの厳しい夏を過ごすためにタコは体によく、元気をつけてくれるからだそうです。

また、これらの地域では、半夏生には『毒気が天から降る』と信じられていたそうで、そのため、青果を食べたり井戸水を飲んだりしてはいけなかったそうです。

立葵が咲き始めました。梅雨入りとともに開花し、てっぺんまで咲くと梅雨が明けるといわれます。

『のびきって 夏至に逢ふたる 葵(あおい) かな』 正岡子規

子規が見たのは立葵(たちあおい)でしょうか？

立葵は梅雨になるとあっという間に背が伸びて、花を咲かせます。



正岡子規の病床の句で、立葵を詠んだ句は結核で病床に

あった子規が伸びきった立葵の花を見て、夏至の頃に咲く様子を詠んだものです。

葵は下から花をつけていく植物です。

上まで咲かなければ部屋の中からは見えないため、夏至の日までに上まで花をつけて「夏至に逢ふたる」状態になったことを詠んでいます

子規が長く病床にあった中で、季節の移り変わりを感じ取り、その中で見つけた美しさを詠んだものと解釈されています。

2025 年の芒種(ぼうしゅ)は 6 月 5 日です。

芒種は「芒(のぎ)のある穀物の種をまく時期」という意味です。

芒とはイネ科の植物に特有の、実の外殻(がいかく)にある棘(とげ)のような、突起のことです。

芒があることによって、動物に食べられてしまうことを防いだり、動物の毛に絡まることで、種子を遠くに運んでもらうことができるそうです。

稲の場合は種をまくというより苗を植える形になるので田植えの時期とも言えます。この時期には、全国各地で豊作を祈願する祭りが行われます。

＜水口祭(みなくちさい)＞

苗代に粃を播く日に水口に土を盛り、季節の花や小枝を挿し、御神酒や焼米などを供え、山の神に豊作を祈ります。

＜御田植祭＞

田植えの時期に早乙女などが実際に田んぼに入って田植えなどの農作業を行い今年の農作業の無事や豊作を祈願します。

稲作活動が本格的に始まったり、虫たちが地上に姿を現し始めたり、芸事の初稽古が行われたり、芒種は様々なことが始まる時期といえます。



＜稽古はじめ＞

能や歌舞伎などの伝統芸能は 6 歳の 6 月 6 日に始めると上手になると言われています。そのため、6 月 6 日は楽器の日、生花の日などが制定されています。

なぜこの日に初稽古を行うと良いのか、そこには諸説あります。

指を使って親指から順に数字を数えていくと、6 の時に小指が立ちます。

そこから「子が立つ」ということで、縁起が良いとされています。

「薄月夜 花くちなしの 匂いけり」 正岡子規

意味：雨雲で月も隠れがちの夜にふとくちなしの花の香りがしました。

雨上がりの夜に、薄月が見え、クチナシの花の香りが漂う様子を捉えた繊細な情景描写として知られています。

月明りもかすかな暗い夜で姿は見えないですが、くちなしの花の香りがしたという季節の情感を詠った一句です。

2025 年の 5 月 21 日は「小満」です。

この時期から陽気が良くなり万物が成長して草木が茂る気候から「小満」と呼ばれています。2025 年の小満は 5 月 21 日頃で、6 月 4 日頃まで続きます。秋に蒔いた麦が穂を出す頃でもあるため、「少し満足する」という意味も込められています。

麦秋（麦の収穫の時期）とも呼ばれ麦が熟し穂を付け始める頃です。この時期には梅雨入り前の晴れた日や走り梅雨が見られることもあります。

五穀豊穡や商売繁盛を願う祭りも開催されます。

小満は、5 月下旬から 6 月初旬を指す言葉です。

梅雨に入るまでの時期であれば天候もよく行楽シーズンといえます。

山登りやハイキングなどの自然に触れ合える場所に出かけ、植物の成長や香りを楽しむのもおすすめです。

また、秋まきの植物であれば実ってくる時期でもあります。

麦などの秋まきの植物を育てている方にとっては、ほっとひと息つける時期ともいわれています。

さまざまな花が見頃を迎える時期でもあります。

①深い青紫の美しい杜若（かきつばた）があります。水辺に群生し、日本情緒たどる幻想的な風情をつくり出します。

また、杜若は万葉集にも詠まれていることから、昔から日本で自生していた花としても知られています。

②スズランも小満に見頃を迎えます。

純白で愛らしいスズランは可憐なイメージがありますが、花や根に毒が含まれているため取扱いに注意が必要です。



新茶の香 真昼の眠気 転じたり 小林一茶

こころを自由に遊ばせて子どもや小さな生き物への慈愛に満ちた句を数多く残した小林一茶。午後のけだるい眠気から、すっきり目覚めさせてくれるような、新茶のすがすがしい香りが伝わってきませんか。

お茶は年四回摘み取られます。その年の最初に摘み取られるお茶を新茶といい。一番茶であり走り茶とも言います。四月の終わりから 5 月中頃までで、香りはよく、おいしいお茶です。静岡茶や宇治茶が有名です。



2025 年の立夏は 5 月 5 日（月）です。

立夏（りっか）とは夏の始まりの時期です。

「夏が立つ」と書くように、夏の兆しが見え始める頃という意味で、陽気も増し夏の気配を感じる時期ですが、本格的な夏はまだまだ先で、日差しが強くなり気温が高くなる日もありますが、基本的には暑くもなく寒くもなく湿度が低く風もさわやかです。

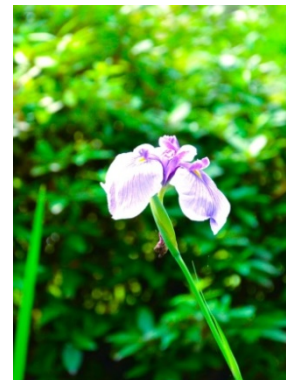
さわやかな青空に、こいのぼりが気持ちよさそうに泳ぎます。
一年のうちで、もっとも過ごしやすい季節です。



暦の上では立夏から夏に入るため、

「立夏を迎え、暦の上では夏となりました」
といったフレーズをよく見聞きします。
いわゆる初夏にあたります。

立夏から 8 月初旬の立秋の前日までが
暦の上では夏になります。



春に咲いた花が散り、緑が生い茂ってくる頃です。
田植えや種まきが始まる時期でもあり、田植えの神事や
豊作祈願の祭りも全国で行われます。

5 月 5 日の端午の節句（こどもの日）は男女問わず
子供の幸せを願う日です。

第二日曜日は母の日です。

母の日にカーネーションを贈るという習慣は、アメリカで一人の女性が母親の
命日に、教会でカーネーションを配ったことからきているそうです。

『 夏立ちし 瓶につつじの 花古き 』

正岡子規

意味：立夏をむかえた。花瓶にはつつじの花が飾ってあるが、
春ではなく夏になったのもう古い花だ。

つつじは春の季語ですが、ここでは「花古き」と春が終わったことを
強調しています。

つつじの咲く春が終わり、今日から夏の季節になったとふと気が
ついたような表現です。

2025 年の「穀雨」は 4 月 20 日です。

「穀雨（こくう）」とは？

「百穀春雨（ひゃっこくはるさめ）」「雨降って百穀を潤す」ということばからきていて、穀物をうるおす春雨が降る様子です。

百穀を潤し、芽を出させ、穀物の成長を促す雨です。

穀物に実りをもたらす雨が降り、新芽や若葉がぐんぐん育っていく季節となります。

春の不安定な天気も安定してきて日差しも強くなってきます。

雨が降って田畑を潤し、種まきや田植えの準備、新茶の収穫などが盛んになってくる季節でもあります。



「曳船や すり切つて行く 蘆の角（あしのつの）」 夏目漱石

俳句の世界では「蘆の角」は、春の季語です。

葭（あし）は川辺や沼辺などの低湿地に群生するイネ科の多年草。葦（あし・よし）と書くことも多く「芦」「蘆」とも書きます。



「穀雨（こくう）」の時期は、葭（あし）が芽吹く

「葭始生（あしはじめてしょうず）」の候と重なります。

「葭」は、水辺で最も大きな草本植物の一つで、葭の新芽は、まるで牙や角のように、まっすぐに力強く天を指して生育します。

葭の茎は長い上に、竹と同様に中が空洞なので、軽くて丈夫な素材であり、最も身近に感じるのはヨシの茎を編んで作った「葭簀（よしず）」です。

また、茅葺き民家の屋根材や垣根などにも利用されています。

「葭の原」は、水質浄化作用に優れており、また陸地と河川の緩衝地となり、生態系を安定的に保ってくれています。その生育力・繁殖力はとても強い一方で、強い風に対しては、柔軟にシななって曲がり、ゆらゆらと揺れてしのぎます。

フランスの哲学者パスカルは「人間は考える葦である」という有名な言葉を残しています。人間は、ひとくきの葦にすぎず、自然の中でひ弱な存在であるが思考を行う点で他の動物とは異なり考えることを通して無限の可能性を持っていると示唆しています。

春が盛りの時季を迎えて夏に向けて更に輝きを増す素敵な時季です。

『穀雨』らしい風景で季節感を味わいながら豊かな時を大切にしたいものです。

2025 年の「清明(せいめい)」は 4 月 4 日です。

この「清明」は「清浄明潔(せいじょうめいけつ)」を略した言葉といわれます。春の穏やかな日差しを受けて、天地万物が清々(すがすが)しく、明るくある様が「清明」の時季です。

4 月 8 日は「花祭り」です。

「灌仏会(かんぶつえ)」「仏生会(ぶっしょうえ)」

「降誕会(こうたんえ)」「花祭り」などとも言われ、

お釈迦様の誕生を祝う日です。

お釈迦様は紀元前 5 世紀頃の 4 月 8 日に誕生したと伝えられています。

「誕生仏(釈迦像)」を囲った小さなお堂にたくさんの花を飾った花御堂を安置します。

寺院では法要が営まれ、参拝者は、花御堂の誕生仏に甘茶をかけてお祝いをし、甘茶を飲んだりします。

甘茶をかけるのは、お釈迦様が生まれた時に九頭の龍が現れ、頭から香湯(甘露の雨)を注いだという伝承に由来します。



この時期、様々なイベントが行われ十三参りが有名です。

4 月 13 日に数えて 13 才になった男女が、

虚空蔵菩薩(こくうぞうぼさつ)にお参りします。

虚空蔵菩薩は智慧と福德の仏として知られていて

虚空蔵菩薩を参拝することで、子供達は、知恵や福德を授かり、厄落としをします。



～春の海 ひねもす のたりのたりかな～

これは江戸時代中期の俳人で画家の与謝蕪村の句です。

1763 年頃、蕪村 47 歳の時の作。春の海で波が終日ゆるやかに、のんびりとゆらめいている情景を描き上げ、読む者の心に、おだやかな春の海が広がるような絵を想像させる。画家ならではの眼差し(まなざし)と、俳人ならではの言語感覚とが、両々相まって生みだされた句と言われています。

この「ひねもす」は「朝から晩まで」「一日中」の意です。

柔らかな日差しの中、穏やかな春の海が一日中、のたりのたりとうねっている様が目に浮かびます。